

ランチョンセミナー

「SurePath 法による Thinlayer について」

MBL(株)医学生物学研究所 情報科学事業部 ^{にしむら ゆかり}西村由香里 (CT, Ph.D)

婦人科細胞診検査は、癌及び前癌病変を検出する有用な方法として世界中で取り入れられ子宮癌死亡率の減少に貢献してきた。しかしながら現在の細胞診検査は、Dr. G. Papanicolaou によって 70 年以上前に確立された方法を基本に現在も行われている。Thinlayer 法は採取した細胞を固定保存液に直接回収し標本の作製を行う手法であり、Papanicolaou による従来の細胞塗抹・固定法に根本的な改定が加わることになる。SurePath 法は、LBC (Liquid Based Cytology) を基本とした Thinlayer 標本作製法であり、1) 分離剤を用いて炎症細胞などを約 40-50%程度取り除くことで上皮細胞や異型細胞の割合を増加させ、2) コーティング処理を施したスライドガラスとの荷電を利用し、細胞を直径 13mm の範囲内へ均一に塗抹する。これらの手法にて作製された Thinlayer 標本は、従来標本に比し異型細胞の出現する割合が高く、炎症性細胞・血球成分などの影響による判定不能症例が減少することで診断精度の高い高品質な標本の作製が可能となり、塗抹の標準化・精度向上への寄与が期待されている。

また、固定保存液中に採取された検体は常温にて数ヶ月保存可能であり、標本の再作製・HPV 検査等への応用が期待されている。

当日は、Thinlayer 標本での細胞の見方、HPV ジェノタイピングへの応用について報告する予定である。